

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 22 日現在

機関番号：34514

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25350731

研究課題名(和文) 就学前体育の教授 - 学習活動の組織化に関する研究

研究課題名(英文) A Study of Organization of Teaching and Learning Activities in Pre-school Physical education

研究代表者

中瀬古 哲 (NAKASEKO, TETSU)

神戸親和女子大学・発達教育学部・教授

研究者番号：00198110

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：就学前5歳児の体育授業並びに授業造りに3年間継続的に参加した(述べ7施設、87回)。その結果以下のことが示唆された。1)「幼児運動指針」28の基礎的動きは意識されていない。2)保育者は子どもの発達課題を正確に把握しているものの、それが教授・学習活動に結びついていない。3)「投動作のスキル」は、「全身のバランス能力」よりも「手先の起用さ」、「自己主張」よりも「自己抑制」との正の相関が高い。4)身体運動文化が、一旦保育園の伝統としてカリキュラムに位置づくると、子どもの主体性が後退した学習を生み出す可能性がある。それを防ぐためには、実践の自由と研究・研修時間の保障が不可避に求められる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to examine the organization of teaching and learning activities of physical education for young children. I participated in the development of classes for 5-year old Children physical education in kindergarten for 3 years (7 places and 87 times in total). As a result, the following suggestions were obtained. 1) In practice, the 28 parts of fundamental movement shown in the Physical Activity Guideline for Japanese Young Children are poorly considered. 2) The Child Care Workers know the developmental tasks, but that knowledge has not been utilized enough in the organization of Teaching-Learning activities in Pre-school Physical education. 3) Ball throwing skills are more related to manual dexterity than systemic balance ability, to self-control than self-assertion. 4) "Good Physical Activity" and curriculum often obstructs children's active learning. Freedom of practice and training is inevitably required to prevent such a situation.

研究分野：総合領域

キーワード：就学前体育 教授 - 学習活動 身体運動文化 カリキュラム 社会的発達 生活課題 発達課題 基礎的な動き

1. 研究開始当初の背景

「幼児期運動指針」の策定

2012年3月、我が国の就学前体育のガイドラインとなる「幼児期運動指針」が策定された。そこでは、毎日、合計60分以上楽しく体を動かすという指針と、1)多様な動きが経験できるような様々な遊びを取り入れる、2)楽しく体を動かす時間を確保する、3)発達の特性に合った遊びを提供する、という3つのポイントと28の基本的な動きの例が提示された。この28の動きは、大きく1)バランス、2)移動、3)用具の操作、の三種類で構成されており、日常生活における動きとスポーツにつながる非日常的な動きが混在している。保育現場においては、スポーツにつながる非日常的な動きを、如何にして子どもの生活・遊びの中に根付かせるかということが実践的な課題となる。しかしながら、保育現場においては、スポーツ指導場面で未だに頻繁に見受けられる指導者の号令一下による体育指導は決して受け入れられない。そこでは、子どもの主体性を重視し、生活と遊びを通して学ぶという保育実践の特質を踏まえ、意図的・合目的な教授・学習活動をどのように組織すればよいかという方法論が構築されなければならない。

保育における「身体運動文化」の位置

保育指針においては、就学前教育の内容は、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の五つの領域で構成されており、いずれの領域においても、具体的で楽しい総合的な活動(生活・遊び)を媒介に基礎力を培うことが目指されている。身体運動文化は、主要には「健康」領域に関わるものであると考えられているが、その総合性ゆえに、すべての領域において有益な機能を有しているとも考えられる。実際、就学前の子どもの発達は、現象的には新しい身体運動或は動作獲得のプロセスであるといっても過言ではなく、身体運動文化の教授・学習活動の組織化という課題は、保育課程づくりに大きな影響を与えられられる。一方で就学前体育は、体力づくりの名の下、運動量や活動量に還元され、活動の総合性が蔑ろにされた教授・学習活動が容認され、それこそが体育の独自性として強調される素地も残っている。今回策定された「幼児期運動指針」も、運動能力調査、活動量調査、歩数調査を踏まえて策定されており、生物学的なレベルの体力という視点も内包している。保育実践としての総合性と身体運動文化としての総合性を保持しつつ尚且つ体育教育の固有性やアイデンティティが追及されなければならない。これは、就学前固有の課題ではなく、本質的には、体育科教育の課題であるとも考えられる。

体育科教育のアイデンティティと正当化をめぐる議論

体育科教育のアイデンティティや正当化をめぐる議論では、「スポーツの技能習熟の保障に加えて、何よりも、文化を『知の体系』

としてとらえ」た「スポーツ文化の学習」が要請されるという主張がある。(友添秀則『体育科教育』2001年4月号)或は、市民の生活の質を改善に貢献する「運動文化への参与」を図り、そのためのコンピテンシーのレパートリーを獲得させることが学校体育の責務であるという正当性のテーゼ並びに学習領域の構成が示されている。(Bart Crum,2008 日本スポーツ教育学会第28回大会特別記念講演)

「幼児期運動指針」においても運動の意義を、1)体力・運動能力の向上、2)健康的な体の育成、3)意欲的な心の育成、4)社会的適応能力の発達、5)認知的能力の発達、が掲げられており、幼児期だからこそ、身体運動文化の教育的機能を、生物学的レベルの発達刺激に矮小化しないということが強く求められるとも考えられる。

以上の議論は、本研究が、体育科教育における「教授・学習活動の組織化」或は「方法論」の確立という課題と密接に関わった研究課題であることを示唆している。

2. 研究の目的

本研究の目的は、就学前体育における教授・学習活動を、保育実践としての意味を失わずに科学的に組織化する方法論を構築するために、身体運動文化の総合性と学習主体を媒介とする活動理論を方法論的基盤として、次のような研究課題について理論的な解明と実践的検討を試みることを目的とする。

就学前体育における指導方法論の理論的・実践的な特徴と課題の整理検討。

保育士の「体育指導観」の特徴と課題を具体的な体育指導の実態との関わりで解明する。

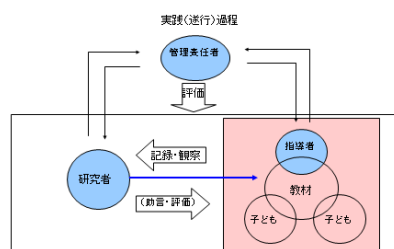
実験的な保育実践研究を通して、教授・学習活動の組織化に資する基礎的知見を導出する。

3. 研究の方法

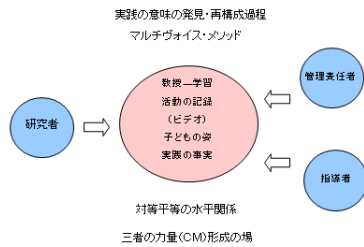
保育園(保育士)と大学(研究者)の関係Ⅰ

- 9:10～9:30 朝の会観察/事前打合せ
- 9:30～10:30 設定保育(運動遊び)
- 10:40～12:00 保育実践共同分析
次回へ向けての課題整理
(※生活場面への介入観察:学生)
- 13:00～14:30 学習会(適宜必要に応じて)

保育園(保育士)と大学(研究者)の関係Ⅱ



保育園(保育士)と大学(研究者)の関係Ⅲ



上記に示したような関係性を構築した保育現場との共同研究体制のもと、以下のような情報を収集・産出する。

- (1) 保育実践現場における「基礎的な動き」についての実態把握
 - 保育士への横断的なアンケート調査による実態把握(量的研究)
 - 指導場面への介入を踏まえた、保育士及び子どもへのインタビュー等による実態調査(質的研究)
- (2) 身体運動文化(運動あそび)と「基本的な動き」の関係解明=教材再構成研究
 - 体育関係指導書における、幼児を対象とした身体運動文化の成果と課題の整理
 - 保育関係指導書における、幼児を対象とした身体運動文化の成果と課題の整理
- (3) 実験的・試験的実践研究
 - 発達段階にそったカリキュラム(保育内容)の編成
 - 単元構成としての仮説プログラムの作成
 - フィールドワークにおける情報収集は、所属大学の卒業研究とリンクして行う。また、保育施設の施設長7名及び保育施設運営会社理事2名と、連携・共同して研究を遂行する。

4. 研究成果

<2013年度>

保育士を対象とした意識調査(実技講座受講者:237名)の結果、「幼児期運動指針」の示す28の基礎的な動きのうち、子どもに欠けている動きとして「ぶら下がる」「よける」「這う」「こぐ」「捕る」が意識されていること、指導に困っている動きとして「よける」「登る」「こぐ」「捕る」「引く」が意識されていることが明らかとなった。

また、子どもへの聞き取り調査(5歳児:91名)の結果、経験できていない動きとして、「よける」「這う」「登る」「引く」「押す」が意識されていること、躓いている動きとして「回る」「ぶら下がる」「登る」「歩く」「こぐ」が意識されていることが明らかとなった。

以上の結果から、「こぐ」「よける」「引く」「登る」という動きの経験を内容に含みこんだ体育カリキュラムの構築並びにそのために必要となる環境整備の重要性が示唆された。また、今後は、設定保育(課業)と自由保育の関係を視野に入れ、28の基本の運動という構成要素を、就学前体育カリキュラムに

どう位置づけるのかを検討することが課題であることが示唆された。

意識調査と並行して、公立保育園(I E 保育園:4回,T保育園:4回,Y保育園4回)、私立保育園(N保育園:11回,K N保育園:10回)、公設民営保育所(S K 保育所;11回,M保育所:11回)設置形態の異なる保育施設7か所を対象に、55回のフィールドワークを実施した。その結果、28の基本的動きは、就学前体育においては、カリキュラムの構成要素並びに指導計画の構成要素としては、ほとんど意識されていない可能性が高いことが示唆された。

<2014年度>

延べ32回のフィールドワーク(介入調査)を実施するとともに、6名の保育者の意識調査を実施した。保育者の「体育指導観」の分析・検討並びに幼児の活動分析・検討に当たっては、「自己調整能力」「身体的不器用さ」という視点を踏まえた調査・観察実験を行った。その結果以下のような示唆が得られた。

保育者は、子どもの「自己調整能力」「身体的不器用さ」をほぼ正確に把握している。しかしながら、それを踏まえた体育あそびの教授-学習活動の組織化は行われていない。

ボールゲーム活動の行動並びにスキルと、「自己調整能力」「身体的不器用さ」との関係を検討した結果以下のような示唆が得られた。統計的な有意さは確認できなかったものの、投動作のスキルは、全身のバランス能力よりも手先の器用さ、との正の相関が高い傾向がうかがえる。投動作のスキルは自己調整力との関係においては、自己主張よりも自己抑制との正の相関が高い傾向がうかがえる。0歳から2歳までの乳児の運動あそびについて、実践現場の実態とニーズを踏まえ、1)室内あそび、2)戸外あそび、3)固定遊具、という三つの領域を設定し、教材(運動遊び)と指導方法(組織化)に向けて具体的な提案(仮説提起)を行った。

<2015年度>

身体運動文化(遊び)の総合性と学習主体を媒介とする活動理論に依拠し、保育実践としての体育の教授-学習活動の組織化に資する基礎的知見の導出を試みた。その結果、以下のような示唆が得られた。

「幼児期運動指針」の示す28の基礎的動きのうち、「こぐ」「よける」「引く」「登る」の動きを含んだカリキュラムと環境整備の重要性並びに「幼児期運動指針」の示す28の基礎的動きが実践現場においてはほとんど意識されていない可能性がある(平成25年度)。保育者は、子どもの発達課題(「自己調整能力」「身体的不器用さ」)をほぼ正確に把握しているものの、それを踏まえた教授

学習活動の組織化は行われていない可能性が高い(平成26年度)。「投動作のスキル」は、「全身のバランス能力」よりも「手先の器用さ」「自己主張」よりも「自己抑制」

との正の相関が高い傾向がうかがえる(平成26年度)。身体運動文化(遊び)が、一旦保育園の伝統としてカリキュラムに位置づく、子どもの主体性が後退した学習を生み出す可能性が極めて高くなり、それを防ぐためには、実践の自由と研究・研修時間の保障が不可避に求められる(平成27年度)。

また、フィールドワークの成果を踏まえ、0歳から2歳までの乳児の身体運動文化(遊び)について、1)室内あそび、2)戸外あそび、3)固定遊具、という3領域を設定し、典型教材(運動あそび)とその指導方法の詳細を提案した。

室内あそび・0歳児:

姿勢の変化と移動を楽しむ遊び

ゆらゆらくすぐりっこ

シーツブランコ

バランスボール遊び

布団の山登りと山下り

ステップの上り下り

室内あそび・1歳児: 色々な姿勢や運動に挑戦するつもりあそび

「 を取りに行こう!」

ころころウォーキング

箱あそび

室内あそび・2歳児:

なりきって全身を動かすあそび

冒険ごっこ

ヒーロージャンプ

怪獣ごっこ

戸外あそび・0歳児前半:

わくわくドキドキする世界へ

光や風にうきうき

草や花との出会い

戸外遊び・0歳児後半: 探索活動開始!

待て待てボール

出発進行

戸外遊び・1歳児: いろいろな動きを楽しむ

よーい、ドン!

しっぽとりごっこ

車でおでかけ

戸外あそび・2歳児:

ダイナミックな動きを楽しむ

とんとんぱ

斜面滑り

手裏剣忍者

固定遊具・0歳後半:

いろいろな姿勢にわくわく!

ブランコゆらゆら

するする滑り台

固定遊具・0歳児後半:

自分から動いてわくわく!

一人ブランコ

座って滑り台

ジャングルジムくぐり

固定遊具・1歳児:

ドキドキ! 固定遊具を探索

腰掛ブランコ

おにいちゃん滑り台

滑り台トンネルくぐり

太鼓橋上り

鉄棒タッチ

固定遊具・2歳児:

イメージしながら新しい動きに挑戦!

一人こぎ、

滑り台の消防ごっこ

ジャングルジムの忍者ごっこ

太鼓橋できた!

鉄棒ブランコ

3年間の、フィールドワークを通して、子どもの発達課題、生活課題を踏まえつつ、身体運動文化(遊び)固有の学習課題を立ち上げることが、研究と実践をつなぐための、必要条件であることが確認できた。今後は、さらに保育実践における体育指導像を帰納的に描き出す方法で新知見の算出を継続し続けることが課題である。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計5件)

中瀬古哲、運動会の意味を問い直す、査読無、ちいさいななま、2013年10月号(No.595)、31-37.

中瀬古哲、運動あそび・運動機能を高める年齢別戸外遊び、査読無、あそびと環境0.1.2歳、第11巻第6号、2014年、38-43.

中瀬古哲、運動機能を高める年齢別室内あそび、査読無、あそびと環境0.1.2歳、第11巻第11号、2014年、1-13.

中瀬古哲、運動機能を高める年齢別固定遊具、査読無、あそびと環境0.1.2歳、第12巻第12号、2015年、38-43.

中瀬古哲、保育実践における体育指導、査読無、たのしい体育・スポーツ、第35巻第1号、2016年、66-67

[学会発表](計0件)

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

[その他]

ホームページ等 無

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中瀬古哲(NAKASEKO TETSU)

神戸親和女子大学・発達教育学部・教授

研究者番号: 19500510

(2) 研究分担者 無

(3) 連携研究者 無